



日本文化の展示 : 1884年ロンドン衛生万国博覧会に 展示された日本の音楽資料

寺内, 直子

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学国際文化学部紀要, 24:A1-A29

(Issue Date)

2005-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCDOI)

<https://doi.org/10.24546/00422826>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00422826>



日本文化の展示：1884年ロンドン衛生万国博覧会に展示された日本の音楽資料

寺内直子

はじめに

本論は、明治時代における日本音楽の海外発信の事例として、音楽取調掛が明治17(1884)年、ロンドン衛生万国博覧会（以下、「ロンドン万博」と略称）に出品した音楽資料を取り上げ、その内容と歴史的意義について考察する論考である。従来、明治期の音楽研究は、西洋音楽の日本への導入、受容に関する視点が中心であり、逆に、日本音楽を西洋に発信する研究は少ない¹。

19世紀後半から20世紀前半にかけての約100年間、欧米では万国博覧会全盛期を迎えた。万国博覧会とはその名が示す通り、西洋とそれ以外の地域との交流の拡大を背景に、「万国」すなわち、さまざまな地域の「文明」「技術」「文化」を、一般の人々に広く「博覧」すなわち展示することを目的とした催しである²。そこで主に展示されたのは、西洋の文明の象徴である数々の近代技術の成果物と、それと対照的な、西洋人によって「発見された」非西洋地域の「珍しい」「異文化」の展示であった。日本という「珍しい」「異文化」に対する興味が、Japonismという現象となったことはよく知られている。

西洋文明取得の必要性を強く感じていた日本人は、すでに幕末から万博への関わりを重視し、積極的に使節を派遣し、日本の物産を出品した。さらに、海外の万博のシステムを国内に取り入れ、1877年以降、内国博覧会を開催していったことは吉見俊哉の論考に詳しい（吉見1992）。万博参加の目的について政府が明確に述べている例として、吉見の論考では、1872年5月、ウィーン万博³参加の目的に関する工部大丞・佐野常民（1822-1902）の発言が紹介されている。それによると、目的は1)日本のすぐれた生産物を展示

し、海外に知らせる、2)西洋の物産や学芸、技術を看取、習得する、3)日本で博覧会を開催するための基礎を整える、4)日本製品の海外輸出のきっかけをつかむ、5)西洋の製品の原価、売価、需要供給の調査をし、貿易に活用する、の5点であった(吉見 1992:117)。ここから浮かび上がるのは、西洋側が日本に期待したものと、日本が西洋に発信しようとしたものとの間のズレである。すなわち、西洋側が非西洋地域に期待したのは、もっぱら、異なる「珍しい文化」の出品であったのに対して、非西洋地域である日本側は、日本がいかに優れた資源と技術を持ち合わせ、将来、西洋と同様の技術と生産性を獲得しうる資質を備えた国であるか、ということを示すことに重点があったのである。

ここで、万博の歴史を通観し、日本が関わった万博すべてを細かく考察する用意はないので差し控える。本論では、むしろ、西洋からの文化展示の期待と日本側からの技術展示の希望のはざまにおける展示アイテムとしての音楽資料に着目し、その内容と意義について考察する。具体的には、1884年5月、ロンドン衛生万博⁴に出品された音楽資料⁵をとりあげ、その内容、目的、その後の影響について分析する。

1. 音楽というアイテム

音楽は、いうまでもなく、民族、地域の好みや特徴を色濃く反映した文化表象の一形態である。しかし、形而上学的な色彩の強い文学や思想と異なり、技術、工芸、音響学、心理学など、形而下学的、あるいは、実践的、自然科学的要素をも含む持つ分野である。そのため、音楽は、当該地域、民族の音色の好みや旋律の美しさ、といった、芸術的、美的な特徴を示すことができるとともに、楽器製作のための工芸の技術や音律算定の理論等々、科学技術の水準も同時に示すことができるのである。

しかし、ここに根本的な問題が一つある。音楽そのものは時間芸術であるために、鳴り響いた次の瞬間に消滅する。現在のように録音技術がない時代には、実際の演奏家を派遣しない限り、「音楽そのもの」を「展示する」こ

とには大きな技術的問題がある。「見る」「まなざし」中心の博覧会で、音楽の本質をよりよく理解させるためにはどのような展示が可能なのか。モノでない音楽をモノによって示すときに、どのようなことが可能なのか。そこでは当然、展示物の選択と展示方法が重要となる。

次に、実際に明治 17(1884)年、音楽取調掛がロンドン万博に出品した品目を考察してみよう。

2. ロンドン万国衛生博覧会に出展された音楽資料

音楽取調掛は、文部省下に明治 12 (1879) 年に設置された音楽のための機関である⁶。東西の音楽研究、将来音楽を担う人材育成、諸学校に音楽を普及させることを目的とした(伊澤 1885/1971:5-8)。初代掛長は伊澤修二(1851-1917)である。『東京藝術大学百年史 音楽学校篇 第一巻』(以下『百年史』と略す)(東京藝術大学百年史編集委員会 1987)には、ロンドン万博に出品された楽器と書類のリストが掲載されている。楽器については、購入時の金額も付記されている。その一覧は表 1 の通りである。

また、これらの楽器と書類は、万博展示後にベルギーのブリュッセル王立音楽院楽器博物館 Musée Instrumental du Conservatoire Royal de Musique de Bruxelles 館長のマイヨン Victor-Charles MAHILLON(1841-1924)の求めに応じて同博物館に寄贈された。それらの資料は、現在、ブリュッセルの国立楽器博物館 Musée des instruments de musique(MIM)に所蔵されており、筆者が 2005 年 3 月に調査した折、楽器は全点、書類も一部をのぞいて、主なものは現存していることが判明した。MIM 所蔵の実物調査によって、『百年史』のリストだけではわからなかった出品物の詳細も明らかになった。

以下、出展品を分類し、その特徴について考察する。

2-1. 楽器とその付属品

ロンドン万博後、ブリュッセル王立音楽院楽器博物館に所蔵されることとなった日本の楽器は、博物館長のマイヨンによって整理された。マイヨンは

表1 ロンドン衛生万国博覧会（1884）出展音楽資料

1. 『東京藝術大学百年史 音楽学校篇 第一巻』 p.189-190 をもとに作成。
2. 楽器の名称表記は『百年史』のとおり。掲載は順不同。
3. MIM (Musée des Instruments de Musique) 欄に「不明」とあるものは、今回のMIMの調査で発見できなかったもの。
4. MIM欄で、Mがつくものはマイヨンのカタログ整理番号。

◎楽器（付属品）	点数	価格	MIM
雅楽 鳳笙（袋）	1	28 圓	M736
雅楽 箏篋（筥、袋）	1	5 圓	M164
雅楽 龍笛（筥、袋）	1	18 圓	M716
雅楽 高麗笛（筥、袋）	1		M717
雅楽 神楽笛（筥、袋）	1	3 圓 50 錢	M718
雅楽 和琴（柱、絃）	1	18 圓	M766
雅楽 箏（柱、絃）	1	28 圓	M763
雅楽 琵琶（撥、絃）	1	20 圓	M783
俗楽 琴（柱、絃）	1	25 圓	M764
琴爪	1	30 錢	
俗楽 三味線（水牛撥）	1	7 圓	M780
俗楽 胡弓と弓	1	7 圓 50 錢	M754
駒		2 錢 5 厘	
俗楽 尺八	1	2 圓	M714
琴其外囊	3	3 圓	不明
琵琶其外囊	5	2 圓	不明
◎唱歌楽譜等			
小學唱歌集 初篇、二篇	各 1		二篇は不明
唱歌掛圖 初篇、続篇、第二篇	各 1		不明
◎音楽理論書（日本語訳）			
樂典	1		D205
音楽問答	1		D204
音楽指南	1		D203
◎傳習生書寫類（詳細 表 2 参照）		2 圓 10 錢	
Appendix A Students Works	1		C213
Appendix B Students Works	2		C212, C215
Appendix C Japanese music Specimens	1		G99
Appendix D School music on koto	1		C214
◎その他			
取調掛撮影（写真）	1	2 圓 10 錢	不明
額縁		5 圓 15 錢	不明
雅俗楽器調音法解説圖	8	1 圓 20 錢	不明
文部省音楽取調掛規則			不明
音楽取調掛成績申報書（英文）	1		C308

博物館所蔵の世界各地の楽器を4巻からなる大著『ブリュッセル王立音楽院楽器博物館 記述的・分析的楽器カタログ *Catalogue Descriptif & Analytique du Musée Instrumental du Conservatoire Royal de Musique de Bruxelles*』にまとめたが、取調掛が出展した楽器は第2巻 (MAHILLON 1909) と第3巻 (MAHILLON 1900) に記述されている。これらの楽器には、『百年史』によると「雅俗楽器調音法解説圖」が付いていたらしいが、今回の調査では見つからなかった。マイヨンは、日本の楽器を入手した後、取調掛長の伊澤修二に、次のような問い合わせの書簡を送り、「雅俗楽器調音法解説圖」の解釈で不明の部分や、言及がない部分について追加情報を求めている。『百年史』にはマイヨンの書簡の日本語訳 (明治当時) の文面が掲載されている (東京藝術大学百年史編纂委員会 1987:190-191) が、漢文調でややわかりにくいので、ここで、内容をわかりやすく要約して紹介する。

拝啓

兼ねて手嶋氏⁷よりもお知らせがあったと思いますが、貴下より私ども博物館にご親切にもご贈与くださった楽器が、無事に到着いたしました。以来、当館の来館者は多数にのぼっております。すぐにでもお礼状を差し上げるべきところですが、こちらの政府から公式の感謝の意を表すべく手続きをしておりまして、このように遅れていますことを申し訳なく思っております。いつとははっきり申し上げられませんが、近いうちに必ず実現いたします。もとより、私は、政府がこの贈与に対してなんらかの返礼をするまでは、片時も安心できません。すでに政府においても、このすばらしい贈り物 (楽器) に対して、貴下、および手嶋氏にご返礼に及ぶべきことことを内定した、と聞いております。

目下、私はご贈与くださった楽器の目録を編成しようとしており、たいへん多忙にしております。ご親切にも楽器に添付くださった掛図によって楽器について正しい略解を得ることができそうですが、残念ながら、六絃の和琴の調弦については説明がないため、この調律の方法についてご教示をいただけれ

ばたいへん幸いに存じます。また、俗箏についてもいくつか調弦があるようですが、これについても説明がありません。俗箏の調弦は、以下のように12種類あることは承知しております。

平調子 曙第一 曙第二

雲井第一 雲井第二 半雲井

片雲井 桜 岩戸

半岩戸 片岩戸 雲井変

右の調弦は、どのようなものなのでしょう。貴下のご著書（英文申報書⁸）中でも拝見できますように、西洋における長短の旋法は、（雅楽の）呂と律にあたと訳されているので、（俗箏の調弦は）それらとも異なるのではないかと推察いたします。

箏についても、7種類の調弦法があるということですが、これは雅楽用の箏の調弦のようで、（俗箏の）12種類の調弦とは名称が異なると理解できません。

琵琶の6種類の調律は、楽箏の最初の6種の調弦とまったく同じものと考えます。また胡弓の2つの調弦も、三味線の最後の2つの調弦と同じと理解しております。まことに恐縮ですが、このような理解でよろしいのか、ご教示いただければ幸甚でございます。

日本の楽譜の記譜法に関する英語またはドイツ語文献がございましたら、私までお送りいただくことができましたら有り難く存じます。費用はすぐにお支払いいたします。私の友人で、中国・清国の税関に勤務しておりますバンオールストという者が著わした書を一読しましたが、これは「支那音楽」と題したものです⁹。もし興味がおありの場合は、横浜のケレーおよびワルシ商社¹⁰にて扱っております。日本音楽についても、同様の書籍をすでに発行のことと思います。「申報書」に、右のような書籍を加えれば、貴国の音楽の大体を理解できるものと、お願いいたしますところでございます。宜しくお取り計らいくださいますよう、前もって、御礼申し上げます。当方でなにかお役にたてることがありましたら、遠慮なくお申し出くださるようお願いい

たします。なお、私からお願い申し上げたことは、貴下のご親友にお願いくださるよう重ねて懇願いたします。

手嶋氏もブリュッセルをご訪問され、面会できましたこと、たいへんうれしく思います。来年は、ロンドンにおいて万国音楽博覧会が開設されることになりました。この機会に、欧州にて貴下にお目にかかれればたいへん幸せで、楽しみに熱望しております。

感謝の気持ちは書状では書き尽くせませんが、まずは取り急ぎ、謹んで御礼申し上げます。

1885年2月11日 ブリュッセルにおいて ヴィクトール・マイヨン
東京 音楽取調所長 伊澤修二 殿

敬具

マイヨンのカタログの楽器解説は部分的にかなり詳しく、伊澤からの追加情報に基づいて、それらを執筆したと考えられる。以下、各楽器に関するマイヨンの解説の要点を紹介する。

1) 雅楽の楽器

笙 *Sho* (ID736)¹¹

各管が「千」から順に番号が振られ、その音高が五線譜で記されている。9番目（也）と16番目（毛）の管にはリードがない旨が注記されている。

箏 *Hichi-riki* (ID694)

「古典音楽のダブルリード楽器の類い」という説明のあと、指孔の開閉図と音高五線譜が表記されている。解説には、日本の指孔図にもとづき音を実際に（鳴らして）照合した旨が記してある。

龍笛 *Riu-teki* (ID716)

Riu はドラゴン、*teki* は笛、という語義解説の後、指孔の開閉図と音高五線譜が表記されている。

高麗笛 *Koma-fouye* (ID717)

Koma は高麗、fouye は笛、という語義解説の後、指孔の開閉図と音高五線譜が表記されている。

神楽笛 *Kagoura-fouye* (ID718)

神楽は、神の儀式に用いる神聖な音楽で、神楽笛はその音楽で主として用いられる、という解説がついている。指孔の開閉図と音高五線譜が表記されている。

和琴 *Waggon* (ID766)

可動式の柱で調弦すると解説されている。4種類の調弦法が五線譜で示されている。ただし、絃の番号は、現在宮内庁楽部などで用いるのと反対で、第六絃から順次1~6の番号が振られている。マイヨンの書簡によると、楽器が出品された当初は「雅俗楽器調音法解説圖」の中には和琴の調弦法の記述が欠けていたらしく、後日、書簡の中で問い合わせている（前掲の通り）。マイヨンの解説に、4つの調弦がそれぞれどの音楽に用いられるかの表記は見えないが、現行伝承と対照すると、第一の調弦は神楽、久米歌、第二の調弦は大歌、第四の調弦は東遊で用いる調弦である。第三の調弦は、今日は用いられない催馬楽和琴（呂）の調弦で興味深い。

マイヨンの記述	調弦	調弦が使用されるジャンル
sol-ré-la-mi-si	e-g-b-d-a-d'	神楽、久米歌
la-mi-si-fa#-ut#	f#-a-c#-e-b-e'	大歌
sol-ré-la-mi-si	d-e-a-b-g'-g'	催馬楽（呂）
la-mi-si-fa#-ut#	a-e-a'-b-c#-f#	東遊

なお、この楽器は2005年3月の調査時に、展示、公開されていた。

箏 *Koto* (ID763)

義爪が俗箏と材質、大きさが異なることを述べ、7種類の調弦を五線譜で示している。伝統的な調弦名、調子名の表記は見えないかわりに、「レ呂旋 *ré rio-sen*」などの分類がある。これは、旋法の主音と「律」「呂」の別を指示

すると考えられる。7種類の調弦は次のように現行各調子の調弦法と対応すると思われる。

マイヨンの記述に見える 旋法の分類	調弦	一致する現在の 楽箏の調弦
ソ 呂旋(sol-ré-la-mi-si)	g-g-d-e-g-a-b-d'-e'-g'-a'-b'-d''	双調調弦
レ 呂旋(ré-la-mi-si-fa#)	d-d-a-b-d-e-f#-a'-b'-d'-e'-f#'-a''	壹越調調弦
ラ 律旋(ré-la-mi-si-fa#)	e'-a-b-d-e-f#-a-b-d-e'-f#'-a'-b'	黄鐘調調弦
ミ 律旋(la-mi-si-fa#-ut#)	b-e-f#-a-b-c#-e'-f#'-a'-b'-c#'-e''-f#''	平調調弦
ラ 呂旋(la-mi-si-fa#-ut#)	e'-a-b-c#-e-f#-a-b-c#-e'-f#'-a'-b'	水調調弦
シ 律旋(mi-si-fa#-ut#-sol#)	f#-b-c#-e-f#-g#-b-c#-e'-f#'-g#'-b'-c#''	盤渉調調弦
ミ 呂旋(mi-si-fa#-ut#-sol#)	b-e-f#- g#-b-c#-e'-f#'- g#'-b'-c#'-e''-f#''	大食調調弦

また、このあと、日本には中国と同様の十二律があることとその名称、十二律を得るために五度と四度を交互に得て行く方法（三分損益）があること、さらに、七音音階に宮、商、角、徵、羽、変徵、変宮（または嬰商、嬰羽）の階名があり、「律」「呂」の二種類があることを述べている。「呂」は三分損益ではじめに得られる（宮調の）音階（F-g-a-b-c-d-e-f）、「律」は羽調の音階（D-e-f-g-a-b-c-d）の特徴を持つことが解説されている。しかし、日本では実際には二つの七音音階 diapason は、変徵、変宮、または嬰商、嬰羽を除いた五音音階 pentaphone になっているとも述べている。

琵琶 *Biwa* (ID783)

洋梨の形（ただし平たい）胴を持つ四絃楽器であること、棹がほぼ直角に後方に折れ曲がっていること、フレットが四つあるなど、構造上の特徴の解説があった後、6つの調弦法とフレットが作り出す音高の五線譜がある。上記の箏の解説と同様、伝統的な調弦名、調子名の表記は見えないかわりに、「レ 呂旋」などの分類がある。6種類の調弦は、各々次のような調子の調弦法と対応すると思われる。

マイヨンの記述に見える
旋法の分類

	調弦	一致する現在の楽琵琶の調弦
レ 呂旋 (ré-la-mi-si-fa#)	a-d-e-a'	壹越調調弦
ミ 律旋(la-mi-si-fa#-ut#)	e-b-e'-a'	平調調弦
ソ 呂旋(sol-ré-la-mi-si)	g-a-d-e*	双調調弦
ラ 律旋(ré-la-mi-si-fa#)	b-c-e-a'***	黄鐘調調弦
ラ 呂旋(la-mi-si-fa#-ut#)	a-b-e-a'	水調調弦
シ 律旋(mi-si-fa#-ut#-sol#)	f#-b-e-a'	盤渉調調弦

*正しくは g-a-d-g'(訳者注) **正しくは a-c-e-a' (訳者注)

なお、マイヨンは前掲書簡の中で、琵琶の調弦6種と、箏の調弦6種（ミ呂旋、すなわち大食調調弦を除く）を同じと解釈してよいか、と尋ねているが、これはより正確に言うなら、「en ré rio-sen (ré-la-mi-si-fa#)」・・・等の「旋法」において同一かどうかを尋ねている、と解釈できよう。このことから、当初、楽器に添付されていた「雅俗楽器調音法解説圖」には、それぞれの調弦について「en ré rio-sen (ré-la-mi-si-fa#)」のような音階構成音のみの解説が掲載されていたのかもしれない。調弦を詳しく示した五線譜は、マイヨンの書簡に対する答えとして、後に和琴の調弦法等とともに送付された可能性がある。

2) 俗楽の楽器

琴 (ママ) Koto (ID764)

マイヨンのカタログでは、楽箏 (ID763) の次に掲載されている。構造は楽箏に近いが、爪が象牙で異なる、と述べている。前掲書簡中に言及されている12種類の調弦名と調弦の五線譜、音階分類が示されている。

平調子	d-g-a-b ♭ -d-e ♭ -g'-a'- b ♭ '-d'-e ♭ '-g''-a''	(mi ♭ -si ♭ -[fa-ut]-sol- ré -la)
曙第一	d-g-a-b ♭ -d-e-g'-a'- b ♭ '-d'-e'-g''-a''	(si ♭ -[fa-ut]-sol- ré -la- mi)
曙第二	d-g-a-b ♭ -d-e-f-a'- b ♭ '-d'-e'-g''-a''	(si ♭ -fa-[ut]- sol- ré -la- mi)
雲井第一	d-g-a ♭ -c-d-e ♭ -g'-a ♭ '- c'-d'-e ♭ '-g''-a ♭ ''	(la ♭ - mi ♭ -[si ♭ -fa]-ut -sol- ré)
雲井第二	d-g-a ♭ -c-d-e ♭ -g'-a ♭ '- c'-d'-e ♭ '-g''-a''	(la ♭ -mi ♭ -[si ♭ -fa]-ut-sol- ré -la)
半雲井	d-g-a-c- d-e ♭ -g'-a'- c'-d'-e ♭ '-g''-a''	(mi ♭ -[si ♭ -fa]-ut-sol-la- ré)
片雲井	d-g-a-b ♭ -d-e ♭ -g'-a ♭ '- c'-d'-e ♭ '-g''-a''	(la ♭ - mi ♭ -si ♭ -[fa]-ut-sol- ré-la)
桜	d-g-a ♭ -c-d- e ♭ -g'-a ♭ '- c'-d'-e ♭ '-g''-c''	(la ♭ - mi ♭ -[si ♭ -fa]- ut-sol- ré)
岩戸	c-g-a ♭ -c- d ♭ -f-g'-a ♭ '-c'-d ♭ '-f'-g''-c''	(ré ♭ - la ♭ [mi ♭ -si ♭]-fa-ut-sol)
半岩戸	d-g-a ♭ -c-d-f-g'-a ♭ '-c'-d'-f'-g''-a''	(la ♭ -[mi ♭ -si ♭]-fa-ut-sol- ré-la)
片岩戸	d-g-a ♭ -c- d ♭ -f-g'-a ♭ '-c'- d'-e ♭ '-g''-a''	(ré ♭ - la ♭ -mi ♭ -[si ♭]fa-ut-sol- ré-la)
雲井変	d-g-a ♭ -c- d- e ♭ -g'-a ♭ '- c'-d'-e ♭ '-g''-a''	(la ♭ - mi ♭ -[si ♭ -fa]-ut-sol- ré-la)

これらの五線譜は、書簡の求めに応じて、後に伊澤が送ってきたものと考えられる。マイヨンは脚注の中で、俗箏の音階について、楽箏の律、呂音階ほど規則的でなく、ディアトニックとクロマティックの混合、と述べている。

三味線 *Siamisen* (ID780)

俗楽の楽器。本調子 (d-g-d')、二上り (d-a-d')、三下り (d-g-c) にあたる三種類の調弦と勘所によって作り出される音階が五線譜で示されている。

胡弓 *Kokiu* (ID754)

二上り (d-a-d')、三下り (d-g-c) にあたる二種類の調弦と勘所によって作り出される音階が五線譜で示されている。時折、西洋のヴァイオリンと同じように調弦する、と紹介している。

尺八 *Siaku-hachi* (ID714)

竹の上部に斜めに切り込んだ吹き口、下唇をかぶせる奏法、指孔を半分または四分の一閉じる運指法などが珍しかったらしく、かなりの紙面を割いて詳しく解説している。また、息を強く吹くと一オクターヴ上の倍音が出るとも書いている。

なお、MIM は、音楽取調掛出品のほか、かなりの点数の日本楽器を所有している。しかし、楽器を収納していた袋類や、コマ、バチ、柱の類はいくつかすでに失われている。また、三味線の皮、絃などは、破断しているものが多い。

2-2. 唱歌楽譜等

『小學唱歌集』初篇

『百年史』掲載の、音楽取調掛出品リストによると、上記楽器とともに『小學唱歌集』初篇と第二篇が出展されたことになっているが、今回 MIM で所在が確認できたのは、『小學唱歌集』初篇（明治 14 年 11 月刊行）だけであった。また、唱歌の楽譜とともに「唱歌掛圖」も初篇、続篇、第二篇の計 3 綴出品されたはずだが、同じく確認できなかった。

なお、MIM ではこの他、明治 21(1888)年、東京音楽学校が発行した『箏曲集』¹²や、『国民唱歌集』（伊澤修二校閲、小山作之助編纂、1891 年、共益商社）、『唱歌翠錦 第一』（奥好義撰、1889 年、共益商社）なども所蔵している。

2-3. 音楽理論書（日本語訳）

『百年史』音楽取調掛出品リスト掲載の『樂典』『音楽問答』『音楽指南』は、三点とも MIM の所蔵が確認できた。これらの音楽書はいずれも原著があり、文部省によって邦訳、出版された。MIM 所蔵のこれらの書籍には、原著書名、著者名とおそらく音楽取調掛で傳習生の教習時に使用したと思われるグループやクラス分けの番号が手書きで書かれている。

『樂典』（明治 16 年 7 月印行）神津専三郎訳

Group 6/ Class 56/ no.202/ Callcott's Grammar of Music

『音楽問答』（明治 16 年 7 月印行）瀧村小太郎訳

Group 6/ Class 56/ no.201/ Yousse's Catechism of Music

『音楽指南』（明治 17 年 4 月印行）内田彌一訳

Group 6/ Class 56/ no.200/ Meason's (ママ)National Music Reader

2-4. 傳習生書寫類

今回の調査で予想外の発見だったのは、「傳習生書寫類」である。「傳習生書寫類」は具体的には、次のような 5 冊の綴じられた書類で、内容的には傳習生すなわち、音楽取調掛で勉強している学生の西洋音楽の和声課題などの実習楽譜と、日本の伝統音楽の五線訳譜、および、唱歌の数曲を箏で学習する際の五線楽譜である。いずれも、肉筆である。

Appendix A *Students Works* (1 冊) C213

幸田延（こうだ・のぶ）、遠山甲子（とおやま・きね）、森富（もり・とみ）、市川道（いちかわ・みち）、木邨作（きむら・さく）、小木友（こぎ・とも）らが五線譜上に書き写した、短い旋律（単旋律または二声）や四声体和声の実習帳である。実習帳には曲名は書かれていないが、『小学唱歌集』と対照させたところ、旋律を同定することができた。傳習生の名前は、五線譜末尾に「幸田のぶ」「森とみ」のように、名字は漢字、名前はひらがなで表記されている。詳しくは 15 ページ、表 2、Appendix A を参照されたい。

Appendix B *Students Works* (2 冊) C212, C215

C215 は、和声の実習帳で、四声体の音符の下に I、IV、V などの和声記号が書かれている。書写者の氏名は、「S. Koyama」のようにすべてアルファベットで表記されている。書写者の氏名は、次の通り。同定できない人物もいるが、後年、唱歌の作曲等で名をなす小山作之助（1863-1913）、比留間賢八（1867-1936）、納所辨次郎（1865-1936）などが含まれている。

S. Koyama	小山作之助（こやま・さくのすけ）（明治 20 年卒業）
K. Hiruma	比留間賢八（ひるま・けんぱち）（明治 20 年卒業）
T. Fukasawa	深澤登代吉（ふかさわ・とよきち）（明治 20 年卒業）

M. Megata	目賀田万世吉 (めがた・まよきち)
K. Shirai	白井規矩郎 (しらい・きくお) (明治 20 年卒業)
B. Noshio	納所辨次郎 (のうしょ・べんじろう) (明治 20 年卒業)
S. Yamamoto	山本生 (やまもと・しょう) (明治 20 年卒業)
C. Matsumoto	松本長 (まつもと・ちょう) (明治 20 年卒業)
K. Kurachi	倉知甲子太郎 (くらち・かしたろう) (明治 20 年卒業)
S. Iwanami	岩波茂雄 (いわなみ・しげお)
K. Uchida	内田籙太郎 (うちだ・くめたろう) (明治 20 年卒業)

C212 は、唱歌〈Omoiizureba (思い出づれば)〉、〈Hotaru (蛍)〉〈Sumera Mikuni (皇御国)〉〈Utsukushiki (うつくしき)〉の写譜である。Appendix A も含め、ほとんどの唱歌は『小学唱歌集』の旋律をそのまま書き写しているが、〈思い出づれば〉だけは、『小学唱歌集』の原曲 (単旋律、G dur、3/4 拍子) から、四声体 (B dur、6/8 拍子) に編曲されている。表 2、Appendix B(C215, 212)を参照。

Appendix C *Specimens of Several Japanese Music* (1 冊) G99 (五線譜スコア)

日本の伝統音楽の代表的な楽曲を紹介する目的の五線譜と思われる。次のように、曲名表記はすべてアルファベットで、楽譜は五線譜である。曲名を日本語に訳すと () 内のようなになる。

Classical Music (古典音楽 (雅楽))

Somakusha (蘇莫者)

Yetenraku (越天楽)

Koto Music (箏の音楽)

Fuki (富貴)

Rokudan (六段)

表2 ロンドン衛生万国博覧会 (1884) 出典「傳習生書寫類」(MIM 所蔵)

Appendix A (C213)

書写者	内 容	出 典
幸田のぶ	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第27 富士山
遠山きね	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第27 富士山
森とみ	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第48 太平の曲
市川みち	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第27 富士山
木邨さく	単声唱歌の書写	小学唱歌集第二編 第48 太平の曲
小木とも	単声唱歌の書写	小学唱歌集第二編 第48 太平の曲
遠山きね	二声唱歌の書写	小学唱歌集第三編 第78 菊
幸田のぶ	二声唱歌の書写	小学唱歌集第三編 第78 菊
森とみ	二声唱歌の書写	小学唱歌集第三編 第75 春の野
市川みち	二声唱歌の書写	小学唱歌集第三編 第78 菊
木邨さく	二声唱歌の書写	小学唱歌集第三編 第75 春の野
小木とも	二声唱歌の書写	小学唱歌集第三編 第75 春の野
遠山きね	四声体和声	F dur, g moll, D dur
幸田のぶ	四声体和声	c mill, d moll, a moll
森とみ	四声体和声	C dur, d moll, a moll
市川みち	四声体和声	A dur, h moll, C dur
木邨さく	四声体和声	C dur, d moll, a moll
小木とも	四声体和声	C dur, d moll, a moll

Appendix B (C215)

小山作之助	四声体和声	C dur, B dur, a moll
比留間賢八	四声体和声	C dur, B dur, a moll
深澤登代吉	四声体和声	C dur, B dur, a moll
目賀田万世吉	四声体和声	C dur, B dur, a moll
白井規矩郎	四声体和声	C dur, B dur, a moll
納所辨次郎	四声体和声	G dur, D dur, a moll
山本生	四声体和声	G dur, D dur, a moll
松本長	四声体和声	G dur, D dur, a moll
倉知甲子太郎	四声体和声	G dur, D dur, a moll
岩波茂雄	四声体和声	G dur, D dur, a moll

Appendix B (C212)

小山作之助	四声体編曲唱歌の書写	小学唱歌集初編 第24 思い出づれば
比留間賢八	四声体編曲唱歌の書写	小学唱歌集初編 第24 思い出づれば
納所辨次郎	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第20 蛍
内田桑太郎	単声唱歌の書写	小学唱歌集第二編 第44 皇御国
山本生	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第18 うつくしき
松本長	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第20 蛍
目賀田万世吉	四声体編曲唱歌の書写	小学唱歌集初編 第24 思い出づれば
深澤登代吉	四声体編曲唱歌の書写	小学唱歌集初編 第24 思い出づれば
倉知甲子太郎	単声唱歌の書写	小学唱歌集初編 第18 うつくしき
白井規矩郎	単声唱歌の書写	小学唱歌集第二編 第44 皇御国
岩波茂雄	単声唱歌の書写	小学唱歌集第二編 第44 皇御国

Nagauta Music (Siamisen) (長唄／三味線)

Murakumo (Yoi yamachi) (群雲／宵や待ち=明の鐘)

雅楽の楽譜は、龍笛、箏、笙、箏、琵琶の五つの楽器のスコアになっているが、笙のパートは和音ではなく、単音で示されている。雅楽以外のジャンルの楽譜は、いずれも単旋律で表記されている。明治40(1907)から、音楽取調掛の後身である東京音楽学校の邦楽調査掛で行われた諸ジャンルの採譜¹³に比べると、かなり簡略なものとなっている。

Appendix D *School Music as played on koto* (1冊) C214

短い二声体の楽曲の五線譜が49曲ほど掲載されている(歌詞はない)。楽曲は『小学唱歌集』の旋律、第一から第四九であるが、第一～四七までは『小学唱歌集』掲載の単旋律の下部にバス声部をつけた二声体に編曲してある。第四八(太平の曲)のみ、3面の箏用に3つの楽譜が掲載されている。おのおの、二声、あるいは和音つきで、3者で合奏するための編曲と考えられる。第四九旋律のみ、『小学唱歌集』の旋律がそのまま書き写されている。

2-5. その他

『百年史』の音楽取調掛出品リストでは、「取調掛撮影」(写真と額縁)、「取調掛規則」も出展されたはずだが、MIMでは所蔵を確認できなかった。前者は額縁入りの取調掛の建物外観の写真と推測される。後者は『音楽取調掛成績申報書』(以下、「申報書」と略)「音楽唱歌教則編成の事」中に見える「文部省音楽取調掛規則」のことと思われる。

『申報書』¹⁴は正式には『音楽取調成績申報書』といい、明治17年(1884)年に刊行された。明治12年以來の音楽取調掛の活動成果を報告したものである。山住によれば、日本語版の完成後、ただちに『申報書』の英文(抜粋)が作成された(山住1971:350-351)。「申報書」の英文抄訳 *Extracts from the Report of S. Isawa* は、MIMの所蔵を確認できた。MIMの所蔵 *Extracts from*

the Report of S. Isawa は手書きのコピーである。内容は以下の通りである。
 () 内に日本語版の該当する可能性の高い箇所を示しておいた。このうち、
 History of the Institute と School Music を除く全文が『百年史』に掲載されて
 いる（東京藝術大学百年史編集委員会 1987: 167-188）ので参照されたい。

History of the Institute（「創置処務概略」から取調掛の沿革に関する部分）

Researches on Oriental and European Music（「諸種ノ楽曲取調ノ事／内外音
 律ノ異同研究ノ事」）

Japanese Scale（「本邦音階ノ事」）

Similarity between the Ancient Greek Music and the Present Japanese Music-
 Hymn to Apollo（「希臘音律ノ事、希臘古楽「アポロ」讃歌発見ノ事」）

School Music

Music Charts, Readers, and Guide Books for Teachers（「唱歌集及ビ楽
 譜掛圖出版ノ事／音楽書類刊行ノ事」）

Musical Instruments（「楽器試製改造及ビ模造ノ事」）

Present State of Musical Instruction（「音楽唱歌伝習ノ事」）

Course of Study for the Special Students Attached to the Institute（「音
 楽唱歌教則編成ノ事」中「傳習生修業学科細目」）

Orchestral Music（「創置処務概略」中の「高等音楽」の部分）

Appendix

Outlines of the History of Japanese Music（「音楽沿革大綱」の後半、日
 本音楽史の部分）

Improvements of Popular Music（「俗楽改良ノ事」）

Specimens of Japanese Koto Music

このうち、マイヨンらの興味を特に引いたのは、前掲、マイヨンの書簡か
 らも知られるとおり、Researches on Oriental and European Music（諸種ノ
 楽曲取調ノ事）や Japanese Scale（本邦音階ノ事）など、おもに日本の伝統

音楽の音律、楽器の調弦、調律に関する部分であった。

3. 展示品の目的

以上、1884年ロンドン万博に音楽取調掛が出展した日本の音楽資料を概観したが、これらの品目が選ばれた理由、あるいは展示品に込められた目的は、大きく二つあるように思われる。第一は、日本の伝統的音楽を紹介すること、第二は、日本における西洋音楽の習得状況を披瀝すること、である。1884年は、明治12(1879)年から活動を続けてきた音楽取調掛が、その活動と研究成果の報告として『申報書』を完成した年であり、ロンドン万博への出品は、この『申報書』の成果や理念を色濃く反映している。

第一の目的のために出展されたと考えられるのは、2-1.で示した楽器類と2-4.の楽譜 *Appendix C Specimens of Several Japanese Music*、および2-5.『申報書』(英文)である。冒頭で述べたように、録音技術を持たない時代の音楽の展示には大きな制約があるが、それを楽器という音を出す道具と、楽譜という視覚化された記号によって展示しようとしたのである。その際の「楽譜」とは、いうまでもなく、西洋の「普遍的」言語である五線譜である¹⁵。楽器にはさらに演奏法、調律・調弦法、音律、音階の解説をつけることによって、より詳しく、音楽のイメージを喚起する努力をしている。

ロンドン万博の展示楽器は、日本の伝統音楽の雅俗の代表的なものが選ばれている。雅楽・俗楽の区別は、いうまでもなく古代中国からもたらされた音楽の分類法である。日本においても古代から近代にいたるまで、この区別が折に触れて言及されてきた。明治時代における伝統的音楽の区分では、宮廷の(それゆえに天皇儀礼に直結した)音楽である雅楽がひとり高尚な(古典芸術)音楽とされ、それ以外の、主として江戸時代に成立し、庶民に享受された(それゆえにもっともポピュラーな)箏、三味線、尺八などのジャンルは一括して俗楽に分類された。『申報書』には、音楽取調掛で「取調」(=調査・研究)を要する対象ジャンルとして、本邦の部は「雅楽」「俗楽」、外国の部は「西洋楽」「清楽」があがっている(伊澤1884/1971: 21)。

ロンドン万博出展楽器において、雅楽器の点数はとりわけ多い。これには、上記のように、雅楽が芸術的に最も高尚なミカドの音楽である、という理由があると思われるが、もともと音楽の様式自体が多種類楽器の器楽合奏であり、それぞれの楽器が精巧な作りであること、さらに美術・工芸的にも見栄えがする楽器やその付属品が歴史的に数多く製作されてきた、という事情があろう。実際、出展された楽器は、笙の匏、箏、和琴の胴の蒔絵、象眼、竜笛、高麗笛の収納筒の漆など、豪華な工芸技術を凝らしたものが少なくない。

俗楽の楽器としては、江戸時代に発展し、明治時代にも、庶民の間でもっとも親しまれていた箏、三味線、胡弓、尺八が出品されている。

選択楽器と対応するように、Appendix C, *Specimens of Several Japanese Music* では、雅楽の唐楽から〈蘇莫者〉（盤渉調）と〈越天楽〉（平調）、箏の音楽として〈富貴〉と〈六段〉、長唄三味線からメリヤスものの〈群雲（宵や待ち／明の鐘）〉が選ばれている。

調律、調弦、音律、音階のシステムについては、マイヨンの書簡によれば、一緒に贈られた「雅俗楽器調音法解説圖」や『申報書』英文が、その理解に貢献した。また、それだけでは足りない部分については、前述の通り、伊澤がマイヨンの求めに応じて後に送ったと思われる追加情報が役にたっている。これらの情報は、西洋と異なるものの、旋法や調弦法について日本人は一貫したシステムを持ち、それを研究・説明し、さらに音楽は五線譜に、文章は英語に翻訳する能力まで持ち合わせていることの照査として機能したと考えられる。

第二の目的のために出品されたのが、2-2. 唱歌と唱歌掛図、2-3. 西洋の音楽理論書の翻訳、および 2-4. の音楽取調掛伝習生の和声実習帳（Appendix A, B, D）である。

まず、2-2. 『小学唱歌集』と唱歌掛図は、歌を通して日本に西洋様式の音楽を普及させるための、主として若年者向けの教材として作成された。2-4. Appendix D の「箏による学校音楽(School Music as played on koto)」は、『小学唱歌集』をもとに、さらにそれを二声体などに編曲し、箏で演奏しな

から教習するためのものである。後者は、一見すると、あたかもピアノ教本の「バイエル」のような様相を呈している。これらの教材からわかることは、おおよそ次の二点であろう。第一に、唱歌集などの旋律、特に日本人作曲家による旋律自体が、日本人の西洋音楽の語法の習得度を示すことができる。また、単純なものから複雑なものへ、素朴なものからより高度な旋律や編曲を配した教則本は、日本人の体系的、論理的な教材作成と運用能力を示すことができる。第二に、これらの教材を実際に用いた伝習生の実習帳 Appendix A と B は、伝習生たちの五線記譜法の習熟度、和声の理解度を示すことができる。

このように、万博における「日本音楽」の展示は、視覚を通して聴覚芸術を展示するという制約のもと、伝統的音楽の音律、音階システム、楽器の工芸技術などを提示、説明するとともに、西洋音楽を体系的に習得する能力と過程をひろく西洋社会に指し示す目的を内包していた。そして、その説明の際には、五線譜や英語という西洋の「普遍的」言語が積極的に活用されたのである。

4. おわりにかえて～ヨーロッパにおけるその後の日本音楽研究

このような万博への音楽資料の出典は、その場限りの一方通行の「発信」ではなかった。先に紹介したマイヨンの書簡は、日本からの発信に応じて、さらなる情報を求めるものであった。また、すでに述べたように、ブリュッセルの MIM では、1884 年万博後に出版された『箏曲集』(1888) や『唱歌翠錦 第一』(1889)、『国民唱歌集』(1891) なども所蔵している。それらの入手経路は必ずしも明らかではないが¹⁶、このことは、その後もマイヨンが日本との接触を保ち、書籍等情報を入手しようと努力し続けていたことを物語っている。

また、音楽取調掛は、明治 18 (1885) 年、ロンドンで行われた発明品博覧会にも音楽資料を出展した (東京藝術大学百年史編集委員会 1987: 193-197)。出展された楽器は 1884 年と同様であったが、それらに加え、さらに

管楽器や弦楽器の調律、調弦を示す音叉、律管の類が多数出展された。これは、日本音楽や楽器の音律をより分かりやすい形で示すための工夫と考えられる。また、文献としては、「傳習生書寫類」や『音楽問答』等の西洋理論書の翻訳、唱歌掛図がなくなっている代わりに「雅俗楽譜」「盲人教授用楽譜表 附 音符」¹⁷などが出品された。これらの楽器は音叉類を除いて、博覧会後にロンドンのサウスケンジントン博物館 South Kensington Museum に寄贈されることになった。これらの楽器と資料に基づいて、日本音楽に関する研究を発展させたのが、民族音楽学者アレクサンダー・エリス Alexander ELLIS (1814-1890) である。エリスが"On the Musical Scales of Various Nations" (諸民族の音階) (ELLIS 1885、エリス 1951) の中で、日本音楽の音律について詳細な分析をすることが可能だったのも、こうした日本からの楽器、音叉、音律論の説明などの資料が入手できたからこそであろう¹⁸。

さて、19世紀末のヨーロッパで、日本音楽に関する万博以外の情報源というと、日本に滞在したヨーロッパ人による音楽の記述、報告がある。その代表的なものが、ドイツ人ミュラー Benjamin C. L. MÜLLER (1824-1893) と、イギリス人ピゴット Francis T. PIGOTT (1852-1925) の論述である。すでに別稿で述べたように (寺内 2004)、両名はともに明治政府の御雇外国人で、ミュラーは医者として、明治 4-9(1871-1875)年まで日本に滞在し、東京医学校で近代西洋医学を教えるとともに明治天皇の侍医を勤めた。一方ピゴットは法律家として明治 21 (1888) 年から 3 年間滞在し、明治憲法制定に貢献した。彼らの本業は音楽ではなかったが、音楽に対してすぐれた理解と教養を持ち合わせており、日本滞在中に見聞きした日本音楽について、たくさんの貴重な証言を残している (MÜLLER 1874,1875,1876, PIGOTT 1891, 1892a,b,c, 1893, 1893-1895、ピゴット 1975)。この二人は、滞在した時期も異なり、記述の視点やスタイルも異なるが、こうした「実際に見聞きした人」による報告は、極東の音楽の実態を伝える貴重な資料として評価された。

しかし、「見聞記」は「見聞記」であり、実際の音楽や楽器ではない。これに比べ、万博に展示される楽器は、実物が目の前にあるということ、手に

触れて演奏してみることができる点において、情報の質がより vivid であった、と言えよう。

しかし、それでもまだ、生の音楽ではない。万博の日本茶屋で接待するゲイシャや、ロンドンの日本人村のような場所で、いくらかは日本音楽の実演に触れる機会があったとしても、まとまった舞台芸能として日本の音楽や芝居・舞踊をヨーロッパ人が実見するのは、1900年の川上音二郎と貞奴のパリ万博公演まで待たなければならなかった。パリ万博における川上劇団の公演のヨーロッパに与えたインパクトは大きく、音楽については、ティエルソ Julien TIERSOT (1857-1936)が Le Ménestrel 紙に楽譜付きの記事を掲載している¹⁹。その時、公演の合間に採録された録音が近年復刻された²⁰。川上劇団はパリ万博の翌年、1901年にはベルリンでも公演し、その合間をぬって、ベルリン大学の心理学研究所において、音楽や芝居のセリフの録音を行っている²¹。そして、この時の録音や貞奴らへのインタビューをきっかけにして、ホルンボステル Erich HORNBOSTEL (1877-1935)が日本音楽の音組織と音楽に関する論文"Studien über das Tonsystem und die Musik der Japaner"を執筆するのである²² (HORNBOSTEL; ABRAHAM 1903/1975)。

これらの論考によると、ヨーロッパの人々の興味は、もっぱら伝統的な音楽のジャンル、楽器、音階に向けられていた。特に、音階・音律に関しては、エリスの"On the Musical Scales of Various Nations"、ホルンボステルの"Studien über das Tonsystem und die Musik der Japaner"という論文のタイトルが端的に示す通り、当時急速に発展しつつあった音響学と録音機器、音高測定器の発明・進化を背景に、ヨーロッパと異なる音程、音高、音階をできるだけ「科学的に」測定・記述することに多大な精力が注がれた。当時、日本がどれくらい西洋音楽に精通していたか、ということにはほとんど関心がないばかりか、ホルンボステルは、ヨーロッパ文化の拡散、今日でいえばグローバル化、によって、ヨーロッパ以外の地域の独自性が失われつつあることを嘆いてさえいる(HORNBOSTEL; ABRAHAM 1903/1975: 67)。

もちろん、この「嘆き」は西洋の身勝手なオリエンタリズムであるが、日

本の音楽文化はその後、この「嘆き」をよそに西洋化の一途をたどり、明治政府がもくろんだ、西洋音楽の習得における日本人のすぐれた能力と芸術性は、いかに発揮されることとなった。雅楽、能、歌舞伎、文楽などの日本のいわゆる「伝統的」な音楽ジャンルは現存しているとはいえ、いまや、日本の音楽文化のごく一部を構成するに過ぎない。それほど、現代の日本の音楽文化は西洋音楽なしには語れない。「今、何が日本の音楽文化か？」と問われたら、私たちは、何を提示するのだろうか。

明治時代の万博における音楽展示は、西洋からのオリエンタリズム的まなざしと「文明国」たろうとする日本の西洋的近代化を希求するベクトルの交差する場として、日本の音楽の「近代化」の思想と表現を雄弁に物語る。それは同時に、マスメディアと交通手段の発達により、はるかに迅速に、複雑に、さまざまな文化が行き来するグローバル社会へと変貌した現代社会において、今一度、日本の音楽文化とは何かを考えさせる契機を提供しているように思われる。

謝辞

本論で扱ったロンドン万博出展日本楽器の調査にあたっては、ベルギー国立楽器博物館のイグナス・デ・カイザー博士 Dr. Ignace DE KEYSER にたいへんお世話になった。ここに謝して記す。

注

- 1 ジャポニズムとの関連で、ロンドンの日本人村、川上音二郎・貞奴の海外公演などに関する論考はいくつかある（倉田 1994、2002、井上；寺内；渡辺 2004）。欧米語でも研究がいくつかあり、演劇の観点から川上音二郎・貞奴を論じたものに、CHIBA 1992, SALZ 1993, 音楽的な観点のものに GROOS 1999, WATERS 1994 などがある。
- 2 万博の歴史については吉田光邦の研究など参照（吉田 1985、1986）。
- 3 ウィーン万博自体は 1873 年 5 月から 11 月まで開催。

- 4 ロンドン万博における日本の教育関係資料の展示については平田 2003 参照のこと。
- 5 これより先、明治 11 (1878) 年にパリ万博に、式部寮雅楽課が雅楽の楽器、楽譜等を出品している (塚原 2005: 47)。また、音楽取調掛は、明治 17 (1884) 年 12 月のアメリカ、ニューオーリンズの綿百年期万博、明治 18 (1885) 年秋、ロンドン発明品博覧会へも楽器等を出品している (東京藝術大学百年史編集委員会 1987: 191-197)。
- 6 明治 20 (1887) 年に東京音楽学校となる。昭和 24 (1949) 年に東京藝術大学音楽学部となる。
- 7 マイヨンのカタログには、Tegima, Directeur du Musée d'éducation de Tokio と紹介されている (MAHILLON 1909: 70)。東京教育博物館長の手嶋精一のことと思われる。手嶋の、ロンドン万博に関する活動、および近代日本の工業技術発達への貢献、業績については三浦 1999 を参照のこと。
- 8 伊澤修二が編集・執筆 (一部、神津専三郎と共著) した音楽取調掛の活動、研究成果報告書で 1884 年成立 (後述)。
- 9 Van AALST, J. A. *Chinese Music*. Published by order of the Inspector General of Customs. Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs; London: P. S. King & Sons. Iv. 84pp. (China. Imperial Maritime Customs 2. Special series no.6(1884).
- 10 横浜、上海、香港、シンガポールなどに支店を持っていた KELLY & WALSH Limited のことと思われる。
- 11 () 内の番号は、マイヨンのカタログにある ID 番号。
- 12 初版と第二版の二部所蔵。
- 13 邦楽調査掛の採譜については、寺内 2000,2001,2003 を参照。
- 14 日本語版全文は、『洋楽事始 音楽取調成績申報書』(東洋文庫 188) (伊澤 1884/1971) を参照のこと。
- 15 『音楽取調成績申報書』の序の部分にあたる「創置処務概略」では、西洋五線譜を「普通の楽譜」と呼んでいる (伊澤 1884/1971: 21)。日本音楽の五線譜化の問題については寺内 2003 を参照。

- 16 『箏曲集』(初版)は、DUMOUTIER という人物が買い付け、横浜からブリュッセルに送ったことがわかっている (DE KEYSER 氏のご教示。2005、3月21日)。
- 17 明治政府は社会福祉政策の一環として、視覚障害者のための音楽院の創設を行っている。「盲人教授用楽譜表 附 音符」の出品は、日本におけるこのような社会福祉の進展度を示すためのもの、と考えられる。
- 18 万博出品とは別に、音楽取調掛からエリスに音叉類が寄贈されていること、それに対するエリスからの書簡などについて、『百年史』を参照のこと(東京藝術大学百年史編集委員会 1987: 194-197)。
- 19 記事の全訳は、井上 2004 を参照のこと。
- 20 『甦るオッペケペー』(都家歌六ほか 1997) この録音を紹介した欧米語論文に MILLER 1998 がある。
- 21 その一部が最近 CD に復刻された (SIMON; ZIEGLER; FRITSCH2003)、この録音の内容を詳しく分析したものが、井上、寺内、渡辺 2004.
- 22 全訳は寺内 2004: 90-126 を参照。

引用文献

【日本語文献】

伊澤修二

1884(1971) 「音楽取調成績申報書」『洋楽事始 音楽取調成績申報書』(山住正己校注)(東洋文庫 188) 東京:平凡社.

井上さつき; 寺内直子; 渡辺裕

2004 『日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究: 1900年パリ万博前後における東西の視線の相互変容』平成13~15年科学研究費補助金(基盤研究B1)(研究代表者:井上さつき)研究成果報告書.

井上さつき

2004 「日本音楽芸能と前衛舞踊の出会い: 1900年パリ万博の貞奴とロイ・フラー」『日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究: 1900年パリ万博前後における東西の視線の相互変容』平成13~15年科学研究費補助金(基盤研究B1)

(研究代表者：井上さつき) 研究成果報告書 pp.1-61.

エリス、アレクサンダー

1951 『諸民族の音階』(門馬直美訳) 東京：音楽之友社 (原著 ELLIS 1885).

倉田喜弘

1994 『海外公演事始』東京：東京書籍.

2002 「解説『宮さん宮さん』のなぞ」『喜歌劇 ミカド：十九世紀英国人が見た日本』東京：中央公論社、pp.133-144.

塚原康子

2005 「幕末維新期の雅楽再編」『明治維新と歴史意識』明治維新史研究 7、明治維新史学会編、東京：吉川弘文館、pp.32-55.

寺内直子

2000 「東京音楽学校邦楽調査掛「雅楽記譜法扣」」『日本文化論年報』3:1-19.

2001 「邦楽調査掛における雅楽採譜作業の経緯」『日本文化論年報』4:18-40.

2003 『近代日本における伝統音楽の再認識～雅楽の五線譜化をめぐる』平成12～14年度科学研究費補助金(基盤研究C2)研究成果報告書.

2004 「1900年前後ヨーロッパにおける日本音楽研究：ホルンボステルとアブラハムの論文を中心に」『日本音楽・芸能をめぐる異文化接触メカニズムの研究：1900年パリ万博前後における東西の視線の相互変容』平成13～15年科学研究費補助金(基盤研究B1)(研究代表者：井上さつき)研究成果報告書, pp.62-132.

東京藝術大学百年史編集委員会編

1987『東京藝術大学百年史 音楽学校篇 第一巻』東京：音楽之友社.

平田諭治

2003 「1884年ロンドン万国衛生博覧会における日本の教育の紹介」『筑波大学教育学系論集』27: 63-75.

ピゴット、フランシス

1975 『日本の音楽と楽器』(服部龍太郎訳)、東京：音楽之友社(原著 PIGOTT 1893).

三浦信浩

1999 『手嶋精一と日本工業教育発達史』東京：風間書房.

都家歌六ほか監修

1997 『甦るオッペケペー 1900年パリ万博の川上一座』東京：東芝EMI, TOCG-5432.

山住正己

1971 「解説」『洋楽事始 音楽取調成績申報書』（山住正己校注）（東洋文庫 188）
東京：平凡社, pp.319-354.

吉田光邦編

1985 『図説 万国博覧会史 1851-1942』京都：思文閣出版.

1986 『万国博覧会の研究』京都：思文閣出版.

吉見俊哉

1992 『博覧会の政治学：まなざしの近代』東京：中央公論社.

【欧米語文献】

CHIBA, Yoko

1992 "Sada Yacco and Kawakami: performers of Japonisme". *Modern Drama* 35(1): 35-53.

ELLIS, Alexander

1885 "On the Musical Scales of Various Nations". *Journal of the Society of Arts* 33, 1884-85: 485-527, 1102-11).

GROOS, Arthur

1999 "Cio-Cio-San and Sdayakko: Japanese Music Theater in Madame Butterfly". *Monumenta Nipponica* 54(1): 41-73.

HORNBOSTEL, Erich M. von ; ABRAHAM, Otto

1903/1975 "Studien über das Tonsystem und die Musik der Japaner (Studies on the Tonsystem and Music of the Japanese)" in *HORNBOSTEL Opera Omnia, Band I*, (translated by Gertrud KURATH, W. MALM, consultant) Den Haag: Martinus Nijhoff, 1975.

MAHILLON, Victor-Charles

1909 *Catalogue Descriptif & Analytique du Musée Instrumental du Conservatoire Royal de Musique de Bruxelles*, deuxième volume, numéros 577 à 1321, Deuxième édition, GAND (Librairie Générale de Ad. Hoste, Editeur).

1900 *Catalogue Descriptif & Analytique du Musée Instrumental du Conservatoire Royal de Musique de Bruxelles*, troisième volume, numéros 1322 à 2055, GAND (Librairie Générale de Ad. Hoste, Editeur).

MILLER, Scott

1998 "Dispossessed Melodies : Recordings of the Kawakami Theater Troupe". *Monumenta Nipponica* 53(2): 225-235.

MÜLLER, Benjamin Karl Leopold

1874 "Einige Notizen über die Japanische Musik", *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Band I*, Heft VI, pp. 13-31.

1875 "Einige Notizen über die Japanische Musik", *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Band I*, Heft VIII, pp. 41-49.

1876 "Einige Notizen über die Japanische Musik", *Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Band I*, Heft IX, pp. 19-35.

PIGOTT, Francis Taylor

1891 "The music of the Japanese". *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 19, pt. 2: 271-367.

1892a "The music of Japan". In: *Proceedings of the Musical Association for the investigation and discussion of subjects connected with the art and science of music*, 18. session 1891-92. London: Novello, Ewer & Co. Pp. 103-120.

1892b "Principal tunings of the modern Japanese Koto". London. 2 pp.

1892c "Musical examples for reference" at the lecture on the "Music of Japan". London.

1893 *The music and musical instruments of Japan*. (With notes by T. L. Southgate.) London: B. T. Batsford. xviii, 230 pp., xvi pl.

1893-95 "The Japanese musical scales". *Transactions and Proceedings of the Japan*

Society 3: 33-38 and 2 pl.

SALZ, Jonah

1993 "Intercultural pioneers: Otojoro Kawakami and Sada Yakko". *Journal of Intercultural Studies* 20: 25-74.

SIMON, Artur; ZIEGLER, Susanne, eds., FRITSCH, Ingrid, annotated.

2003 *Walzenaufnahmen Japanischer Musik 1901-1913*, Berliner Phonogramm-Archiv 1, ph-A-WA1, Berlin: Staatliche Museen zu Berlin.

Van AALST, J. A.

1884 *Chinese Music*. Published by order of the Inspector General of Customs. Shanghai: Statistical Department of the Inspectorate General of Customs; London: P. S. King & Sons. Iv. 84pp. (China. Imperial Maritime Customs 2. Special series no.6.

WATERS, Robert F.

1994 "Emulsion and influence: Japonisme and western music in *fin de siècle Paris*". *Music Review* 55(3): 214-226.